



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	<資料紹介>ロシア語アルファベットのローマ字翻字について
Author(s)	秋月, 孝子
Citation	スラヴ研究, 22, 253-270
Issue Date	1978-03-25
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/5075">https://hdl.handle.net/2115/5075</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113218.pdf



- 1977年2月 丸毛 忍 氏 (亜細亜大学)
- 1977年2月 三宅 正樹 氏 (明治大学)
- 1977年2月 ベレンド 氏 (Iván T. Berend) (ブダペスト経済大学)
- 1977年3月 生田 真司 氏 (朝日新聞)
- 1977年3月 直野 敦 氏 (東京大学教養学部)
- 1977年3月 勝田 吉太郎 氏 (京都大学)
- 1977年4月 寺谷 弘 氏 (青山学院大学)
- 1977年6月 ヴァリツキー 氏 (Andrzej Walicki) (ポーランド科学アカデミー、  
哲学・社会学研究所)
- 1977年7月 細谷 千博 氏 (一橋大学)
- 1977年7月 ティフ 氏 (Feliks Tych) (ポーランド統一労働者党中央委員  
会附属中央文書館)
- 1977年7月 ホルスティ 氏 (K. J. Holsti) (ブリティッシュ・コロンビア大学)
- 1976年5月~1976年10月 森田 稔 氏 (宮城教育大) 内地研究員
- 1977年1月~1977年4月 ステファン 氏 (John J. Stephan) (ハワイ大学) 客員調査員

### 《図書室だより》

## ロシア語アルファベットのローマ字翻字について

秋 月 孝 子

- はじめに
- I. ソ連で用いられている翻字法
  - II. 翻字の際に問題となる文字
  - III. 翻字表の紹介
  - IV. 結 び

### はじめに

翻字 (Transliteration) とは、あるアルファベットの文字を異なるアルファベットをもつ他の言語の文字に便宜的に移しかえることである。このような必要はとくに固有名詞の転記の際に感じられるであろう。たとえばソ連で起った出来事の報道において各国のジャーナリズムは、人名や地名<sup>1)</sup>などを自国の文字をもって記している。このような転記には音

1) 人名や地名の翻字については次のような文献がある。

(1) Л. В. Щерба, "Транслитерация латинскими буквами русских фамилий и географических названий". *Известия АН СССР. Отделение литературы и языка*, 1940

を移しかえる方法と、逐次的に文字をおきかえる方法がある。前者は音訳 (Transcription) であり、後者がここにいう翻字である。この両者の区別は必ずしも明確ではないが、例えば Хрущев は英語圏では Khrooshtchoff と書けば発音に近いであろうし<sup>2)</sup>, Khrushchev は文字を移し変えた翻字である。一般にラテン文字を用いる国では、キリル文字とラテン文字の起源の類似から、ロシア文字の転記の際には翻字によることが多いように思われる。しかしながらロシア文字のラテン文字による翻字の方法も一通りではない。たとえば前記の Хрущев は欧米諸国において (1) Khrushchev のほか (2) Khruchtchev (3) Xruščev (4) Chruščev (5) Hruštšev (6) Hruščev/Khrushchev\* (7) Chruschtschow (8) Khrushhev (9) Chruschtschev などのように多種多様に表記されている<sup>3)</sup>。このような違いは翻字に際してラテン文字に相応する文字のないロシア文字を移しかえるときに、なるべく自国語の発音に近似的なラテン文字をあてはめようとする結果生じたものである。さらに同じ国においてもロシア文字の翻字については多くのこととなった見解があり、それぞれ違った翻字がなされている。

以上のような国ごとの、あるいは諸機関による翻字方法の相違は、ロシアに関する文献情報をとり扱う図書館にとって大きな障害である。たとえば著・編者名についても、出版物に表記されたものをそのまま用いることは目録編成に混乱を招くことになる。したがって目録や書誌<sup>4)</sup>、索引類<sup>5)</sup>の編集に際しては、翻字されたデータをもう一度ロシア

(3): 118-126. この論文はロシアの人名や地名をラテン文字に翻字する場合について書かれたものである。

- (2) Р. С. Гиляревский, Б. А. Старостин, *Справочник; иностранные имена и названия в русском тексте*. Мос., 1969. 本書はロシア語以外の外国語の人名や地名がロシア語でどのように書きあらわれるかについて書かれている。英語他 17ヶ国語の主な人名・地名を各国語の原綴のもとに示し、ロシア語に翻字する場合の具体的な例とそれらの一覧表が付されていて興味深い。
- 2) E. Garfield, "Transliteration≠Transcription≠Translation". *Current Contents*, 16 (1974/Apr.): 5-7.
- 3) 上記の (1)~(9) は筆者の目にふれた翻字システムにしたがって、翻字したものであるが、以下にそれらのシステムを用いている機関名、雑誌名および独自の翻字法の提案者をそれぞれ列挙した。
- (1) L. C., Bodleian, BM, BSI, NY Pub. Lib., Camb. Univ., *Slav. & E. Eur. Rev.*, *Slav. Rev.*, *Current Dig. of the Sov. Pr.*
- (2) Bib. Nat.
- (3) *Slav. & E. Eur. J.*
- (4) いわゆるドイツ語圏, チェコ, ポーランド等において一般に用いられている翻字法である。Bay. Staatsbib., Deut. Bib., Deut. Staatsbib., J.-G.-F. Herder Inst., Staatsbib. Preuss. Kulturbesitz. Bib. Narodowa, Bib. Univ. w Warszawie. Státní knihovna ČSSR.
- (5) Helsinki Univ. Libr.
- (6) ISO R 9-1955/ISO R 9-1968 (varianton)\*.
- (7) *Aussenpolitik*.
- (8) J. Schulz, "Reversible Transliteration kyrillischer Buchstaben". *Nachr. Dok.*, 24 (1974): 240. "Russian-English Transliteration. Comment by E. P. Hamp". *Science*, 130 (1959): 483.
- (9) F. Görner, *Entwicklungsmöglichkeiten der Übertragung fremder Schriften im deutschsprachigen Raum*. Berlin, 1975. TS Anhang 3.
- 4) 書誌を編集する場合にも、編者が独自の翻字法を作成し、記述の表記を統一して、テキストに引用することもしばしばである。一般には本文の前に使用されている翻字表の一覧が付されている。また書誌に限らず、A. Auty & D. Obolensky ed., *Companion to Russian Studies*. Camb. &c., 1977. においてはテキストの一般的叙述とロシア語についての叙述の区別をおこなって、二種類の

文字に逆翻字し、改めて統一した規則のもとにラテン文字に翻字する作業が必要となる。このためには各国の翻字の傾向についてもある程度の知識をもっておくことが不可欠である。そこで小文ではソ連や欧米諸国のいくつかの翻字システムの特徴を紹介し、あわせてロシア文字の翻字における諸問題を考えてみたいと思う。

### I. ソ連で用いられている翻字法

最初にロシア語が実際に用いられているソ連において、ロシア語のラテン文字への翻字法が歴史的にどのような変遷をたどってきたかを簡単に紹介しておきたい<sup>6)</sup>。

かつてロシアにおける翻字には大きく分けて二つの傾向があった。一つはスラヴの統一という理念のもとに1906年に科学アカデミーが採用した翻字法であり、他の一つはロシア地理学協会(Русское Географич. Об-во)が採用した西欧的表記の翻字法に代表されるものである<sup>7)</sup>。ロシア革命後には郵政人民委員部(Наркомат Связи)、対外貿易人民委員部(Наркомат Внешторг)、全ソ規格委員会(ОСТ ВКС)が後者と同様な傾向をもってそれぞれの翻字システムをつくった。

どのシステムにおいてもロシア文字の а, б, в, г, д, з, к, л, м, н, о, п, р, с, т, у, ф は、これに対応するラテン文字 a, b, v, g, d, z, k, l, m, n, o, p, r, s, t, u, f にそのままおきかえられる。その他の文字についてみると、科学アカデミー方式は主としてチェコ語、スロヴァキア語で用いる分別記号(diacritical mark)、すなわち ž, č などにおける<sup>8)</sup>の使用に特徴をもっている。これによれば ж→ž, ч→č, ш→š, щ→šč となる。他方英語をもとにした貿易人民委員部と全ソ規格委員会の翻字表によれば ж→zh, ч→ch, ш→sh, щ→sch の如くあらわされ、ドイツ語の傾向が著しい地理学協会のシステムでは ж→zh, ч→tsh, ш→sh, щ→stsh, х→ch となっている。郵政人民委員部の方式はフランス語的な正字法の傾向をもっているので、ж→j, ч→tch, ш→ch, щ→stch のほか y→ou, ю→iou とあらわされる。

アカデミーとその他の機関の翻字方式の違いは、軟母音(я, и, ю, е, ё)の二重機能を認めるかどうかにもあらわれている。これらの母音は、アカデミー方式では、子音又は ь, ъ の後にくる場合とそうでない場合に翻字の区別が厳密になされているが、その他の機関

翻字システムが使用されている。

- 5) 雑誌記事索引などは、翻字システムについて独自の問題をかかえているように思われる。R. R. Blanken, "The preparation of international author indexes, with particular reference to the problems of transliteration, prefixes, and compound family names". *Jour. of the Amer. Soc. for Inf. Sci.*, 22 (1971/Jan.-Feb.): 51-63 参照。E. Garfield, "Science citation index"—a new dimension in indexing". *Science*, 144 (1964): 649-654 参照。
- 6) ソ連においては、ロシア語のラテン文字への翻字はたんに情報技術的な問題にとどまらず、また政治的な問題とも絡んでいるように思われる。すなわちそれは多民族国家であるソ連の現実を反映して言語政策、少数民族政策と密接に関連しているのである。E. Allworth, *Nationalities of the Soviet East publications and writing system*. New York & London, 1971. 翻字については pp. 295-387 参照。P. С. Гиляревский, Н. В. Крылова, "Транслитерация библиографических описаний на языках народов СССР латинскими буквами". *Сов. библиография*, 1960 (5): 37-44. この論文は少し古く、短いものであるが、上述の事情を明らかに反映しながらロシア語およびソ連の諸民族の言語のラテン文字による翻字について簡潔に記している。
- 7) А. А. Реформатский, "Транслитерация русских текстов латинскими буквами". *Вопросы языкознания*, 1960 (5): 96-103.

ではこの区別をしていない。これは今日でもソ連の言語学者がヨーロッパの翻字法について批判しているところである<sup>8)</sup>。上記の五つの団体のシステムにおいて翻字の際に違いのみられる文字を表にあらわすと次のようになる。

第 1 表\*

機関名 文字	(1) 科学アカデミー 1906—1925**	(2) 地理学協会 1911	(3) 郵政人民委員部	(4) 貿易人民委員部	(5) 全ソ規格委員会 8483 1935
e	e/je (ь と ъ の後)	e	e	e	e/je (母音の後と語頭)
ë	jo/to (子音の後)	—	—	—	jo
ж	ž	zh	j	zh	zh
и	i/ji (ь の後)	i	i	i	i
й	j	j	i	j	j
у	u	u	ou	u	u
х	ch	ch	kh	kh	kh
ц	c	tz	ts, tz	z(イタリック)	c (ts)
ч	č	tsh	tch	ch	ch
ш	š	sh	ch	sh	sh
щ	šč	stsh	stch	sch	sch
ъ	省略	,	—	省略	j
ь	ī/省略 (е, и, ю, я, ë の前)	j/j' (е, и, ю, я の前)	省略/i (語中においてのみ)	j	j/省略 (語尾と二つの子音の間)
э	e	é	e	e	e
ю	ju/iu (子音の後)	ju	iou	ju	ju
я	ja/ia (子音の後)	ja	ia	ja	ja

\* Л. В. Щерба, "Транслитерация латинскими буквами русских фамилий и географических названий". *Известия АН СССР. Отделение литературы и языка*, 1940 (3): 120.  
 \*\* ソ連科学アカデミー 1951-1957 年版翻字システムについては第 3 表参照。

それでは次に科学アカデミー翻字方式のその後の発展についてみてみよう。これは 1906, 1925, 1939, 1951~57 の四つの時期にわたって、基本的な原則はそのまま残しながら、少しずつ改訂を行ってきた。すべてのアカデミー方式に共通する特徴は、すでにのべたように分別記号を使用し、軟母音の二重機能を認めることである<sup>9)</sup>。子音や硬母音については、どのシステムにおいても殆んど変化がみとめられないが、軟母音 (e, ë, и, ю, я) および硬音符 (ъ), 軟音符 (ь) についてみれば若干の修正がなされている。例えば 1925 年版と 1939 年版の違いをみれば次の第 2 表の通りである<sup>10)</sup>。

1956 年のアカデミー翻字表の改訂版はこれまでの最新版であるが、これはロシア語固有名詞のラテン文字による国際翻字規則案としてソ連閣僚会議に提出されたものである。ソ連の言語学者 A. A. レフォルマツキーによれば、この規則は、使用に際して何らの言語学や正字法の知識を必要としないことに特徴をもっているという。さらに彼はこの案がラテン文字からロシア文字への逆翻字 (reversibility) の可能性を備えていることをも指摘している。しかし第 3 表をみれば分かるように、この規則は、語頭もしくは母音、子音、嘯

8) A. A. Реформатский, *Ibid.*, 102.

9) A. A. Реформатский, *Ibid.*, 101.

10) Л. В. Щерба, *Ibid.*, 125. Реформатский は 1939 年版を「全般にわたっておげさで矛盾している」ときびしく批判している, *Ibid.*, 101.

第 2 表

	1925 年版翻字表	1939 年版翻字表
e	{ e \ je (ь と ъ の後)	{ e (子音の後) \ je (語のはじめ, 母音と ь, ъ の後)
ë	{ jo \ io (子音の後)	{ o (ж, ч, ш, щ の後) \ jo
x	ch	h
ъ	省 略	' (アポストロフィ)
ь	{ j \ 省略 (e, ë, и, ю, я の前)	{ j \ ' (e, ë, и, ю, я の後はアポストロフィ)
ю	{ ju \ iu (子音の後)	ju
я	{ ja \ ia (子音の後)	ja

音、硬・軟音符の後など、かなり細かな例外規則を定めており、必ずしも単純明快なものではない。

## II. 翻字の際に問題となる文字

以上みてきたように、ロシア語の翻字の際に問題となるのは、33文字のうち主として15文字である。それは6個の子音(ж, х, ц, ч, ш, щ), 6個の母音(ю, я, ы, е, ë, э), 半母音(и) およびそれ自身の音をもたない記号(ь, ъ)である。このことは欧米諸国の図書館やスラヴ関係雑誌におけるロシア語の翻字法においても同様である。次にこれらの文字がソ連以外でどのように翻字されているかをみることにする。

### (1) 子音(ж, х, ц, ч, ш, щ)

欧米でもっとも広く用いられている翻字法は、米国議会図書館(L. C.)の翻字表に準ずる英語圏のシステム(zh, kh, ts, ch, sh, shch)とドイツおよび東欧諸国のシステム(ž, ch, c, č, š, šč)である。後者はソ連科学アカデミーの翻字と全く同様である。このほかフランス国立図書館が ж→j, ч→tch, ш→ch, щ→chtch の如くフランス語に準じた翻字表をもつように、自国語の発音に近似した表記をする機関が多く、上記以外にも数多くの変種があるのは当然である。たとえば第3表にみるように х→h<sup>11)</sup>, ц→z, tz, ч→tch, tš, tsh, ш→sch, щ→schtsch, štš, stsh のような翻字も用いられている。このような翻字の多様性は、これらの子音が表記の困難な嘯音(шипящий звук)であるために生じたものであるが、これをドイツや東欧では分別記号(diakritische Mark)で解決し、英語やフランス語では近似的な発音の文字をあてようとしているのである。前者がロシア語と系統を

11) x を h と翻字するのは、ソ連科学アカデミー 1939 年版、ヘルシンキ大学、Mathematical Rev. および ISO/R 9-1955 と 1968 (E), ISO/DIS 9-1975 などである。G. Razran は「英語の h 音はロシア語の x 音をもっていない」ので、ロシア語の x に h をあてはめることは適切ではないと指摘する。しかし、x に対する kh はそれぞれの音とひとしくないが、分離音(separate sound)の存在を示し、さらに長い間慣用的に用いられてきたという長所があると主張する。G. Razran, "Transliteration of Russian". *Science*, 129 (1959): 1111-1112, 参照。

同じくしながらラテン文字を用いるチェコ語およびスロヴァキア語の表記を基礎にしているため、自然な感じがするのに対し、後者に無理が感じられるのは否めないであろう。また翻字の可逆性 (reversibility) の観点からみても、後者は不利のように思われる。

(2) 母音 (ю, я, ы, е, ё, э)

ю と я についてみれば、 $\widehat{i}u$  と  $\widehat{i}a$  (L. C. 方式を用いる図書館),  $yu$  と  $ya$  (BM, BSI をはじめとする英国方式の図書館, ニューヨーク公共図書館),  $ju$  と  $ja$  (主としてドイツ語, 東欧語, 北欧語圏) の三つが主要な翻字方式である。このほかに  $iou, ja$  (フランス国立図書館) などの例外的なものもある。L. C. 方式はアメリカ以外にも影響の大きい翻字方式であるが、 $\widehat{i}u$  および  $\widehat{i}a$  などにおける二文字にまたがる連結線はタイプライターによる印字が不可能であり、これを採用するところはそれ程多くない。D. T. レイは  $i\bar{u}, i\bar{a}$  を提唱している<sup>12)</sup>。ロシア語では  $\bar{y}u, \bar{y}a$  はほとんど現われず、それとの混同は起らないし、音声学上からみても問題はないからである。しかしこれによって翻字された  $khoz'iaistvo$  を  $хозяйство$  ではなく  $хозяйство$  に戻すためには例外的規則かロシア語の知識を必要とするであろう。

ы は一般にラテン文字  $y$  に翻字される。大英博物館で  $ы=ui$ , 英国標準化協会 (BSI) で  $ы=\bar{y}$  となるのは例外的である。前者のシステムによると語尾の  $-ый$  は  $uy$  となる。しかし  $ы$  に  $y$  をあてはめることは、上記のように  $ю, я$  を  $yu, ya$  と翻字する方式においては逆翻字の際に  $yu, ya$  を  $ыу, ыа$  としないだけのロシア語の知識が要求されることは言うまでもない。

е は一般に  $e$  と翻字されるが、語頭や母音の後などでは  $je, ie, ye$  などを用いるところもある。ё についてみればそのまま  $\bar{e}$  を用いる場合と、 $e$  の上の分音記号を除いて  $e$  とする場合、さらに  $jo, io, yo$  などの場合がある。米国クィーンズ・カレッジの G. ラズランはこのことについて、ロシア語の  $e$  は語頭、母音や硬・軟音符 (ь, ъ) の後では明確に英語の  $yes$  における  $ye$  のように発音されるので、全く  $ye$  と翻字すべきだと主張している<sup>13)</sup>。すなわち  $Есенин, Андреев, полное собрание, здоровье, съезд$  は  $Yesenin, Andreyev, polnoye sobraniye, zdorov'ye, s'yезд$  となるのである。さらにロシア語の子音の後の  $e$  は非常に軟くなり英語の  $e$  に相当するので、 $Ленин, Тургенев$  などは  $Lenin, Turgenev$  が適切で、 $Soviet$  は唯一の例外だとのべている。しかしこの意見は音声学にもとづくもので、翻字の問題とはかけ離れているように思われる。後述するように翻字においては機械的なおきかえと逆翻字 (reversibility) の容易さこそが重要なのである。

э の翻字は、 $e$  が用いられる場合と  $\bar{e}, \bar{e}, \bar{e}$  のように  $e$  の上に符号をつける場合、さらに国際標準化機構 (ISO) 833-1974 (E)<sup>14)</sup> のように  $eh$  とするものがある。問題は  $e$  を

12) Russian-English transliteration. Four separate comments and reply. Hamp, E. P., A. C. Fabergé, M. B. & I. D. London, D. T. Ray & G. Razran. *Science*, 130 (1959): 482-488.

13) G. Razran, "Transliteration of Russian". *Science*, 129 (1959): 1112.

14) ISO 833 (1974) International Standard ISO 833. Documentation-international list of periodical title world abbreviations. First ed. 1974-11-01. p. 2. (Table 1-Transliteration of Slavic Cyrillic alphabets).

そのまま用いる場合で、これは ekonomika などの逆翻字のとき экономика と誤まることも避けられないであろう。

半母音の ï は i, i, j, y などに翻字される。しかしケンブリッジ大学やニューヨーク公共図書館のように、原則として i を用いながら、人名や形容詞の語尾に限り、-ий を y とする場合もある。これはたとえば Белинский, Достоевский などのロシア人名が一般に Belinsky, Dostoevsky のように表記される慣例にならったものであろう。

軟音符 ь と分離符 ъ についてみれば、前者は子音の後にあって前の子音を軟かく発音する役目を持ち、後者は子音と軟母音の中間にあってこれらを分離して発音することを示すだけの記号で、本来それ自身の音をもっていない。そのため翻字においても ь は ' もしくは ' , ъ は " もしくは " であらわされる。しかしなかにはこれらを全く無視してしまう翻字方式もみられる。これによれば сесть (坐る), съесть (食べる) や брат (兄弟), брать (取る) は共に sest や brat となって区別がつかず、これらを機械的に逆翻字することは不可能となる。

### III. 翻字表について

末尾にかかげた翻字表(第3表)は、ソ連および諸外国の図書館等やスラヴ関係雑誌に用いられている翻字方式の一覧である。この中には国際標準化機構のように翻字の変遷を示すため古い翻字表もあわせてかかげてある。

この表の作成のため、筆者は文献による調査のほかに、いくつかの図書館(主として東西ドイツ、東欧)に翻字方式を照会した<sup>15)</sup>。回答には翻字表のほかに利用の実情が簡単に記されているのでそれを紹介しておきたい。

#### 1) 英国図書館

送られてきた翻字表は1970年までに出版された本に対して用いられているもので、それ以降のものについては米国議会図書館の翻字システムが適用されている<sup>16)</sup>。

#### 2) ドイツの図書館

西独、東独の6図書館<sup>17)</sup>の回答から明らかになったことは、ドイツでは「プロイセン図

15) L. C. や NY Pub. Lib. などのように、一般によく知られている翻字システムをすでにもっているものは照会の対象より除外されている。調査は、残念ながら時間的制約のため網羅的に行うことはできなかった。今回の照会の対象としたものは、ヨーロッパにおいてスラヴ系言語の図書を多く所蔵していると考えられる主な図書館である。もし機会があったら、後日あらためて組織的な調査をおこないたいと思う。BM は長い歴史をもつと共に、スラヴ系言語の図書も豊かに所蔵しているが、近年その名称 (British Library) と組織を一部分かえたので、とくに現状について問いあわせてみたものである。

16) British Library, London. f. 1753. 英国図書館, スラヴ・東ヨーロッパ部門の研究助手 O. Kamtekar 氏の 1977 年 1 月 17 日付書簡。

17) 1. Bayerische Staatsbibliothek, München. f. 1558.

2. Deutsche Bibliothek, Frankfurt a. M. f. 1946.

3. Bibliothek des Johann-Gottfried-Herder-Instituts, Marburg. f. 1950.

4. Staatsbibliothek Preussischer Kulturbesitz, Berlin. f. 1961. 第2次大戦後、ベルリンが東西に分割されるにおよんで、長い歴史をもつプロイセン国立図書館 (Preussische Staatsbibliothek) の蔵書がプロイセン文化財国立図書館 (西ベルリン) とドイツ国立図書館 (東ベルリン) に二分されて今日に至っている。ここで使用されている翻字表は1899年のプロイセン国立図書館のシステムをそのままひきついたものである。

書館辞書体目録要領 (Instruktionen für die alphabetischen Kataloge der preussischen Bibliotheken vom 10. Mai 1899)』の中のロシア文字翻字表が、現在でも基本的に受け継がれていることである。この翻字システムの特徴は ž, č, š, šč などにもみられる分別記号 (diakritische Mark) の使用である。バイエルン国立図書館からの回答<sup>18)</sup>にはドイツ語圏の学術図書館の翻字について、最近の動向が記されている。それによると西独では「辞書体目録のための新規則 (Neue Regeln für die alphabetische Katalogisierung)」が作成されたとき非ラテン系文字の言語のための翻字システムも検討された。この試みは、各地方の大きな学術図書館が今まで用いてきた翻字システムを簡単には変えることが出来ないという理由から最終的に失敗した。しかしそれらの図書館との二年にわたる協議の後に、バイエルン国立図書館がドイツ連邦のスラヴ学者あてに照会をおこなうことになったが、その結果西ドイツの学術図書館においては今まで使用されてきた翻字システムを今後も継続して用いることが決定された。ドイツ図書館 (Deutsche Bibliothek) の回答では、「ドイツでは米国議会図書館の翻字システムが問題になることはほとんどない。なぜならそれは言語学上の基礎からすでに逸脱したものであるから」ということが指摘されている<sup>19)</sup>。しかしドイツでも情報学の分野では、主としてアングロ=アメリカの翻字システムが優勢であり、J. シュルツ<sup>20)</sup>および F. ゲルナーの論文<sup>21)</sup>において明らかなように、電算機情報処理 (EDV) にふさわしい翻字システムの確立をめざしている。

東独でも原則として上記の「プロイセン要領」が用いられている。ドイツ国立図書館 (Deutsche Staatsbibliothek) は 1974 年新しい辞書体目録規則 (Regeln für die alphabetische Katalogisierung) を印刷したがその付則に含まれているスラヴ文字の翻字表<sup>22)</sup>を「プロイセン要領」と比べれば僅かの違いしかみられない。このことは 70 年以上にわたって使用されてきたこの規則の根強さを思わせるものである。また東独科学アカデミー言語学研究所が用いている「学術図書館辞書体目録規則」<sup>23)</sup>もプロイセン図書館辞書体目録要領の第 4 版にあたるもので、その中のロシア文字翻字表はドイツ国立図書館のものほとんど差異がない。ここでは最近になって目録規則とともに翻字表の改訂がすすめられており、その原則として「国際標準化機構推奨規格 R 9 スラヴ系キリル文字の翻字の国際的方式、2 版、1968 年 9 月」が適用されることになっているが<sup>24)</sup>、その場合でも取捨選択が<sup>25)</sup>、お

5. Deutsche Staatsbibliothek-DDR, Berlin f. 1661.

6. Akademie der Wissenschaften der DDR. Zentralinstitut für Sprachwissenschaft, Berlin. f. 1700.

18) バイエルン国立図書館 Dr. V. Pleyer 氏の 1977 年 1 月 25 日付書簡。

19) ドイツ図書館の I. Bouvier 氏の 1977 年 2 月 3 日付書簡。

20) J. Schulz, "Reversible Transliteration kyrillischer Buchstaben". *Nachr. Dok.*, 24 (1973): 239-241.

21) F. Görner, *Entwicklungsmöglichkeiten der Übertragung fremder Schriften im Deutschsprachigen Raum*. Berlin, 1975, TS. この論文はプロイセン文化財国立図書館の東ヨーロッパ部門部長 F. Görner 氏より、1977 年 2 月筆者あてにおくられたものである。

22) ドイツ国立図書館目録部部長 P. Kitlel 氏の 1977 年 2 月 1 日付書簡によればこの翻字表は 1977 年 1 月から東独のすべての図書館で用いられることになった。

23) "Regeln für die alphabetische Katalogisierung in wissenschaftlichen Bibliotheken" Anlage II. n. d.

24) 詳細については "Regeln für die alphabetische Katalogisierung. Anlage 5. Tab. I. Berlin,

そらく行なわれる筈である。

### 3) ヘルシンキ大学図書館

フィンランド式の翻字法（全国書誌の編集の場合）とISO/R 9-1955の翻字法（外国文献の目録）の二つの翻字法が使用されているようであるが<sup>26)</sup>、この両者の相違は別表にみるように三文字 (II, V, III) にすぎない。

### 4) チェコ国立図書館

回答としておくれた翻字表は Pravidla jmenného katalogu, Praha, 1967 から抜萃されたものである。ここのスラヴ部長である J. ストルナデル氏は「世界の他の図書館の翻字表は我々には適さない。なぜならそれらは我々のアルファベットにふさわしくないからである。」と手紙に記している<sup>27)</sup>。

### 5) ポーランドの図書館

ポーランドでは国民図書館とワルシャワ大学図書館の二つから回答がよせられた。前者では「ポーランド基準 PN-70/N-01201」の中の「スラヴ系キリルアルファベットの翻字」\* が用いられている。これは「国際標準化機構推奨規格 (ISO/R 9)」にもとづいている<sup>28)</sup>。後者においては、すべてのポーランド学術図書館に義務づけられたグリチとボルコフスカ編集の目録規則<sup>29)</sup>にしたがっているというが<sup>30)</sup>、翻字システムそのものは国民図書館のそれと本質的にちがわない。

最後に、東独、フィンランド、ポーランドの各国で採用されつつある国際標準化機構 (ISO=International Organization for Standardization) のロシア語アルファベットの翻字方式について簡単にふれておきたい。ISO は、各種の規格を統一するための国際的な機

1974. pp. i-iii” 参照、東独科学アカデミー、言語学研究所からの 1977 年 2 月 24 日付書簡。

- 25) ISO R 9-1968 年版の適用とその場合の「取捨選択」の例として次のものをあげることができよう。J. Schulz, *ibid.*, 240. および UNISIT/ICSU-AB Working Group on Bibliographic Description により推奨されたシステム (International List of Periodical Title Word Abbreviations, 1970. p. xi).
- 26) Helsingin Yliopiston Kirjasto, Helsinki. f. 1640 in Turku (Åbo). ヘルシンキ大学図書館、書誌部・部長 Thea Aulo 氏の 1977 年 1 月 14 日付書簡による。しかし一つの機関において同時に二つの翻字システムが用いられることはないので、フィンランド大学では ISO/R 9-1955 のシステムを採用し、National Bibliography や National Collection の目録を作成する場合（これはヘルシンキ大学が編集するのかわ、どこの機関が編集するのかわ不明）と公共図書館ではフィンランド・システムが用いられているとも理解される。
- 27) Státní knihovna ČSSR. Slovanská knihovna, Praha. f. 1958. チェコ国立図書館スラヴ部長 Dr. Josef Strnadel 氏の 1977 年 2 月 3 日付書簡。このチェコの翻字表の詳細は *Slavia*, 20 (1950): 159 に掲載されており、具体的な例が引用されていてわかりやすい。
- 28) Biblioteka Narodowa, Warszawa. f. 1928. ポーランド国民図書館、書誌標準化センター部長 B. Karamać 氏の 1977 年 2 月 14 日付書簡による。  
\* [Polish Standard PN-70/N-01201] 「Transliteracja słowiańskich alfabetów cyrylickich」国民図書館の翻字システムをしらべるに際して F. Görner 氏の引用する [Przewodnik bibliograficzny. Urzędowy wykaz druków wydanych w Polskiej Rzeczypospolitej Ludowej. Hrsg. v. Biblioteka Narodowa, Warszawa, n. d.] を参照できなかったのは残念である。
- 29) J. Grycz, W. Borkowska, Skrócone przepisy katalogowania alfabetycznego. Wydanie 4 poprawione i uzupełnione. Warszawa, 1970.
- 30) Biblioteka Uniwersytecka w Warszawie. f. 1817. ワルシャワ大学図書館副部長 H. Zasadowa 氏の 1977 年 2 月 2 日付書簡。

関で（日本は未加盟）、キリル文字の翻字についても検討を重ねており、これまでに1955、1968、1975年の三回にわたり ISO Recommendation R 9 として改訂版を出している<sup>31)</sup>。1968年版は翻字表そのものは1955年版と同じであるが、ж, ѝ, х, ц, ч, ш, щ, ю, я の9文字について、ž, j, h, c, č, š, šč, ju, ja のほかに zh, i, kh, ts, ch, sh, shch, yu, ya を一グループとして用いる特例を認めている<sup>32)</sup>。これは西欧諸国の主張によるものと思われる。しかし1975年の改訂草案ではこの特例は削除されることになった<sup>33)</sup>。

#### IV. 結 び

これまでみてきたように、欧米諸国におけるロシア文字の翻字法にはそれぞれ長い歴史があり、その間にいくらかの修正がなされてきたが、それにもかかわらず原則には大きな変化はないようである。そしてこれを大きく分ければ嘯音に分別記号を用いるソ連・東欧・ドイツの諸国と、自国語の発音に従って数文字の組合わせでこれを表記しようとするその他の諸国の試みがある。嘯音だけについてみて後者は種々の変種を生み出している。さらに翻字の混乱を大きくしているのは、自国語に対応する文字のないロシア文字をいかに表記するかについての見解の相違である。ある者はこれを言語学あるいは音声学的な立場から主張し<sup>34)</sup>、また他の者はこれを便宜的なものとして解決しようとした<sup>35)</sup>。前者は音訳 (transcription) の正確さを期したものとも言えるであろう。しかしもともと翻字というのはあくまで便法であって、その主眼は文字と文字の対応の明確さ、機械的なおさかえの容易さに求められるのではないだろうか。

近年における翻字の論争をみても、すでに50年代にみられた正字法や、正確な発音への厳密な要求は少くなり、次第に明確性、単純性、可逆性 (reversibility) の三要素が追求されている。「可逆性」というのは、一度翻字したもので誤りなくもとの言語にもどすことのできる可能性である。これらの要素はコンピューターによるドキュメンテーション

- 31) キリル文字をローマ字に翻字する方法の標準化は ISO によって検討され、その歴史は以下のよう  
な経過をたどって現在にいたっている。  
1939: 国家標準化協会国際連盟 (ISA. ISO の前身) 翻字標準化のための提案草案作成。  
1948: ISO 第46技術委員会 (ISO/TC 46) において検討。  
1951: ISO 勧告草案は大多数の賛成をえられなかった。  
1952: ISO 同上第2次案全会一致で採択。  
1955: ISO/R 9 第1版刊行。  
1968: ISO/R 9 第2版刊行。  
1975: ISO/R 9 第2版改訂草案。  
翻字法の標準化については J. Orne, "Transliteration of Modern Russian". *Libr. Jour.*, 88  
(1963): 4157-4160 参照。
- 32) ISO Recommendation R 9. International system for the transliteration of Slavic Cyrillic characters. 2nd ed. Sept. 1968. p. 5.
- 33) ISO/TC 46. Draft international standard ISO/DIS 9. Documentation—transliteration of Slavic Cyrillic characters. (Revision of ISO/R 9-1968) 1975. pp. [5-6] この特例の削除の理由は「厳密な翻字の原則に反する」というものである。1968年の第2版において、上述の9文字を一グループとしてどちらかのシステムを採用しようという選択の規定が削除されることにより、1975年の改定草案は ѝ→i; ч→ä の二点をのぞいて1955年の初版に準ずるものとなった。
- 34) "Russian-English transliteration. Comment by E. P. Hamp". *Science*, 130 (1959): 482-483.
- 35) F. L. Kent, "International progress in transliteration". *Unesco Bulletin for Libraries*, 10 (1956): 130.

においては不可欠なもので、ここではすでに従来の翻字法をのりえた試みさえなされているようである<sup>36)</sup>。

終りに翻字法についての最近の見解をいくつか紹介して小文の結びとしたい。米国ランド・コーポレーションの R. ニースウェンダーは翻字を「発音上の正確さととらわれないうで、任意のアルファベットの文字を他のアルファベットの文字に明確におきかえる手段」とみなし<sup>37)</sup>、ある程度の正字法の無視を承認している。プロイセン文化財国立図書館 (Staatsbibliothek Preussischer Kulturbesitz) の F. ゲルナーは 1975 年ドイツ規格委員会 (DNA) に「情報学およびドキュメンテーションの領域のための基本的規則案<sup>38)</sup>」を提出し、この中で新しい翻字システムを提案した。これは従来のプロイセン方式の翻字法とは全く異り、あくまでもドイツ語の立場から作られたもので、膨大な情報の機械化処理を考慮し、逆翻字の正確さを目的としている。さらにニューヨークのユダヤ研究所のヴェインバーグ女史は「ドキュメンテーションにおける翻字<sup>39)</sup>」という論文の中で、翻字法のもつ矛盾をのべるとともに、一人の著者のすべての作品を一ヶ所に集中するために苦勞して統一カタログ (integrated catalogue) を作成することにも疑問をのべている。彼女は目録における翻字をやめて、非ラテン文字資料のドキュメンテーション・ワークのためには、コンピューター用の特殊なプログラミングを使用することを提案している。翻字についてはこのほかにもいろいろの意見があるが、図書館員の立場とドキュメンタリストの立場にはおのずから相違がある。しかしいずれにしても翻字における確実さと容易さのディレンマの克服は今後に残された課題であると思われる。

#### 参 考 文 献

- 1) A. L. A. Cataloging rules for author and title entries. 2. ed. Chicago, 1949.
  - 2) Allworth, E., Nationalities of the Soviet East publications and writing system. New York & London, 1971.
  - 3) Anglo-American cataloging rules. Chicago, 1967.
  - 4) Blanken, R. R., The preparation of international author indexes, with particular reference to the problems of transliteration, prefixes, and compound family names. *Journal of the American Society for Information Science*, 22 (1971/Jan. -Feb.): 51-63.
  - 5) Franklin, D., Reversible punctuation Russian transliteration. *American Documentation*, 1966 (Jul.): 142-145.
  - 6) Garfield, E., "Science Citation Index"—a new dimension in indexing. *Science*, 144 (1964): 649-654.
  - 7) Garfield, E., Transliteration⇌Transcription⇌Translation. *Current Contents*, 16 (1975/Apr.): 5-7.
  - 8) Görner, F., Entwicklungsmöglichkeiten der Übertragung fremder Schriften im Deutschsprachigen Raum. Berlin, 1975. TS.
- 
- 36) D. Franklin, "Reversible punctuation Russian transliteration". *Amer. Doc.*, 1966 (Jul.): 142-145.
  - 37) R. Neiswender, "Russian transliteration sound and sense". *Special Lib.*, 1962 (Jan.): 37-41.
  - 38) F. Görner, "Erarbeitung grundlegender Normen für den Bereich Information und Dokumentation". Görner, *Ibid.*, title page.
  - 39) B. Weinberg, "Transliteration in documentation". *Jour. of Doc.*, 30 (1974): 18-29.

《研究活動報告》

- 9) ISO Recommendation R 9. International system for the transliteration of Cyrillic characters. 1. ed., Oct. 1955.
- 10) ISO Recommendation R 9. International system for the transliteration of Slavic Cyrillic characters. 2nd ed. Sept. 1968.
- 11) ISO/TC 46. Draft international standard ISO/DIS 9. Documentation—transliteration of Slavic Cyrillic characters into Latin characters. (Revision of ISO/R 9-1968) 1975.
- 12) ISO 833 (1974) International Standard ISO 833. Documentation-international list of periodical title world abbreviations. 1st ed. 1974-11-01. p. 2 (Table 1-Transliteration of Slavic Cyrillic alphabets).
- 13) Kent, F.L., International progress in transliteration. *Unesco Bulletin for Libraries*, 10 (1956): 132-137.
- 14) Neiswender, R., Russian transliteration sound and sense. *Special Libraries*, 1962 (Jan.): 37-41.
- 15) Orne, J., Transliteration of modern Russian. *Library Journal*, 88 (1963): 4157-4160.
- 16) Razran, G., Transliteration of Russian. *Science*, 129 (1959): 1111-1113.
- 17) Russian-English transliteration. Four separate comments and reply. [By] E. P. Hamp., A. C. Fabergé, M. B. & I. D. London, D. T. Ray & G. Razran. *Science*, 130 (1959): 482-488.
- 18) Schulz, S., Reversible Transliteration kyrillischer Buchstaben. *Nachrichten für Dokumentation*, 24 (1973): 239-241.
- 19) Simmons, J. S. G., Russian bibliography; libraries and archives. Oxford, 1973.
- 20) Walker, G. P. M., Russian for librarians. London, c1973.
- 21) Weinberg, B., Transliteration in documentation. *Journal of Documentation*, 30 (1974): 18-31.
- 22) Weinreich, U., The Russification of Soviet minority languages. *Problems of Communism*, 2 (6) (1953): 45-57.
- 23) Wellisch, H., Transcription & transliteration; an annotated bibliography on conversion of scripts. Silver Spring, Md., 1975. (筆者末見)
- 24) Гиляревский, Р. С., Б. А. Старостин, Справочник; иностранные имена и названия в русском тексте. Мос., 1969.
- 25) Гиляревский, Р. С., Н. В. Крылова, Транслитерация библиографических описаний на языках народов СССР латинскими буквами. *Советская библиография*, 1960 (5): 37-44.
- 26) Реформатский, А. А., Транслитерация русских текстов латинскими буквами. *Вопросы языкознания*, 1960 (5): 96-103.
- 27) Щерба, Л. В., Транслитерация латинскими буквами русских фамилий и географических названий. *Известия АН СССР. Отделение литературы и языка*, 1940 (3): 118-126.
- 28) 馬場重徳, ローマンス, ゲルマン, スラブ, フィノ・ウゴル, バルト, ルーン諸文字と翻字或は転写, 図書館短大紀要 10 (1975): 47-58.
- 29) ドキュメンテーション ハンドブック (文献情報便覧), 文部省大学学術局編, 東京 1967.
- 30) 「キリル系文字の転写法」矢田俊隆編『東欧史』(新版) 東京 1977. 巻末付録 p. 2 所収.
- 31) 日本ドキュメンテーション協会編, ドキュメンテーションの標準化・同 サプリメント (NIPDOK シリーズ 11, 11S) 東京 1970, 1972.

\* \* \* \* \*

昭和51年度スラブ研究施設出版物として『ソ連・東欧研究者名簿改訂版』(1977)がある。これは『わが国におけるソ連・東欧研究の動向』(1972)の改訂版である。不備な点も多くあると思われるので、お気づきのむきは当施設松田宛お知らせ下されれば幸いである。

なお兩名簿とも残部があるので、必要とされる方は、返信用切手（各120円）を同封の上、事務室まで申し込まれたい。

\* \* \* \* \*

昭和51年度受入図書の名なものは次の通りである。

単行本

- The American bibliography of Slavic and East European studies for 1968 and 1969. Editor: K. E. Maylor. Assistant editors: T. A. Duket and T. L. Sanz. Assisted by R. Stefanka. Columbus, Ohio, c1974.
- The American bibliography of Slavic and East European studies for 1970, 1971, and 1972. Editor: J. P. Scanlan. Associate editor: J. F. Eason. Columbus, Ohio, c1974.
- The American bibliography of Slavic and East European studies for 1973. Editor: A. R. Navon. Columbus, Ohio, 1975.
- Auty, R. ed.: An introduction to Russian history. Ed. by R. Auty & D. Obolensky, with the editorial assistance of A. Kingsford. Cambridge &c., c1976. (Companion to Russian studies, vol. 1)
- Batalov, E.: The philosophy of revolt; criticism of left radical ideology. [Tr. from the Russian by K. Judelson] Moscow, c1975. (Theories and critical studies)
- Berliner, J. S.: The innovation decision in Soviet industry. Cambridge, Mass. & London, c1976.
- Black, C. E. ed.: Comparative modernization; a reader. Ed., with an introduction by C. E. Black. New York & London, c1976. (Perspectives on modernization)
- Calder, A.: Russia discovered; nineteenth-century from Pushkin to Chekhov. New York, c1976.
- Chalidze, V.: To defend these rights; human rights and the Soviet Union. Tr. by Guy Daniels. London, 1975.
- Chekhov, A. P.: Anton Chekhov's life and thought; selected letters and commentary. Tr. from the Russian by M.H.Heim in collaboration with S. Karlinsky. Selection, commentary and introduction by S. Karlinsky. Berkeley &c., c1973.
- Chyzhevskiy, D.: History of nineteenth-century Russian literature. By D. Cizevskij. Tr. by R. M. Poruer. Ed., with a foreword, by S. A. Zenkovsky. Vol. 2. Nashville, 1974.
- Cieszkowski, A. D., hrabia, 1814-94: Prolegomena zur Historiosophie. Von August von Cieszkowski. Berlin, 1838. [Nendeln/Liechtenstein, 1976]
- Dossick, J. J.: Doctoral research on Russia and the Soviet Union, 1960-1970; a classified list of 3,150 American, Canadian, and British dissertations with some critical and statistical analysis. New York & London, 1976. (Garland reference library in social science, vol. 7)
- Dziewanowski, M. K.: The Communist Party of Poland; an outline of history. 2. ed. Cambridge, Mass. & London, 1976. (Harvard University. Russian Research Center. Studies, 32)

- Eltzbacher, P. : Anarchism ; exponents of the anarchist philosophy. Tr. by S. T. Byington. Ed. by J. J. Martin. With an appended essay on Anarcho-Syndicalism by R. Rocker. Plainview, N. Y., [1972] (Essay index reprint series)
- Faber, B. L. ed. : The social structure of Eastern Europe ; transition and process in Czechoslovakia, Hungary, Poland, Rumania, and Yugoslavia. New York &c., c1976. (Praeger special studies in international politics and government)
- Field, D. : The end of serfdom ; nobility and bureaucracy in Russia, 1855-1861. Cambridge, Mass. & London, 1976. (Harvard University. Russian Research Center. Studies, 75)
- Fischer, A. : Sowjetische Deutschlandpolitik im Zweiten Weltkrieg 1941-1945. Stuttgart, 1975. (Studien zur Zeitgeschichte)
- Frank, J. : Dostoevsky ; the seeds of Revolt 1821-1894. Princeton, c1976. (Praeger special studies in international politics and government)
- Germany. (Democratic Republic, 1949-) Ministerium der auswärtigen Angelegenheiten : Beziehungen DDR-UdSSR 1949 bis 1955. Dokumentensammlung. Berlin, 1975.
- Geyer, D. ed. : Sowjetunion. Aussenpolitik 1955-1973. [2] Unter Mitarbeit v. W. Berner et al. Köln & Wien, 1976. (Osteuropa-Handbuch)
- Grabski, A. F. : Myśl historyczna polskiego oświecenia. Warszawa, 1976. (Dzieje polskiej myśli historycznej)
- Griffith, W. E. ed. : The Soviet Empire ; expansion & détente. Lexington, Mass. & Toronto, c1976. (Critical choices for Americans, vol. 9)
- Harriman, W. A. : Special envoy to Churchill and Stalin 1941-1946. By W. A. Harriman & E. Abel. New York, c1975.
- Harris, C. D. : Guide to geographical bibliographies and reference works in Russian or on the Soviet Union. Annotated list of 2660 bibliographies or reference aids. Chicago, 1975. (Chicago. University. Dept. of Geography. Research paper, no. 164)
- Hejzlar, Z. : Czechoslovakia 1968-1969 ; chronology, bibliography, annotation. [By] Z. Hejzlar [&] V. V. Kusin. New York, 1975.
- Hoensch, J. K. : Polen 30 Jahre Volksdemokratie. [Von] J. K. Hoensch, & G. Nasarski. Hannover, c1975.
- Ingarden, R. : O poznawaniu dzieła literackiego. Z języka niemieckiego przełożyła D. Gierulanka. Warszawa, 1976. (His Dzieła filozoficzne)
- International Congress of Historical Sciences. 13th, Moscow, 1970 : XIII<sup>e</sup> [i. e. le treizième] Congrès international des sciences historiques, Moscou 1970 : études présentées à la Commission internationale pour l'histoire des assemblées d'états LII. Studies presented to the International Commission for the History of Representative and Parliamentary Institutions, Varsovie-Moscou. Varsovie, 1975.
- International Congress of Historical Sciences. 14th, San Francisco : Poland at the 14th International Congress of historical Sciences in San Francisco ; studies in comparative history. Wrocław &c., 1975.
- Israel, G. : The Jews in Russia. Tr. by S.L. Chernoff. London & Tonbridge, c1975.
- Israelian, V. : Die Antihitler-Koalition ; die diplomatische Zusammenarbeit zwischen der

- UdSSR, den USA und England während des Zweiten Weltkrieges 1941–1945. [Von] V. Issraelian. [Aus dem Russischen von L. Steinmetz] Moskau, 1975.
- Jones, D. L. comp.: Books in English on the Soviet Union, 1917–73; a bibliography. New York & London, 1975. (Garland reference library of social science, Vol. 3)
- Kaiser, R. G.: Russia; the people & the power. London, c1976.
- Kanet, R. E. ed.: The Soviet Union and the developing nations. Baltimore & London, c1974.
- Katz, Z. ed.: Handbook of major Soviet nationalities. Z. Kats, editor, R. Rogers, associate editor, F. Harned, assistant editor. New York & London, c1975.
- Kieniewicz, S.: Warszawa w latach 1795–1914. Warszawa, 1976.
- Kosing, A.: Nation in Geschichte und Gegenwart; Studie zur historisch-materialistischen Theorie der Nation. Berlin, 1976. (Grundfragen der marxistisch-leninistischen Philosophie)
- Leonhard, W.: Three faces of Marxism; the political concepts of Soviet ideology, Maoism, and humanist Marxism. Tr. by E. Osers. New York, c1970.
- Ludz, P. C.: The changing party elite in East Germany. Cambridge, Mass. & London, c1972.
- Luxemburg, R.: The national question; selected writings. Ed. and with an introduction by H. B. Davis. New York & London, c1976.
- Marks, S.: The illusion of peace; international relations in Europe 1918–1933. London, 1976. (The Making of the 20th century)
- Maurois, A.: Tourguéniev. Paris, 1931.
- Między feudalizmem a Kapitalizmem; studia z dziejów gospodarczych i społecznych. Prace ofiarowane Witoldowi Kuli. Wrocław &c., 1976.
- The Modern encyclopedia of Russian and Soviet history. Ed. by J. L. Wiczynski. Vol. 1–2. Gulf Breeze, Fl., 1976.
- Narkiewicz, O. A.: The green flag; Polish populist politics 1867–1970. London, c1976.
- Pamlényi, E. ed.: A history of Hungary. Contributors: The late I. Barta et al. Tr. revised by M. Morris and R. E. Allen. London & Wellingborough, 1975.
- Polski słownik biograficzny. [Komitet redakcyjny: przewodniczący komitetu redakcyjnego: B. Leśnodorski] Tom 18. Wrocław &c., 1973.
- Puškin Symposium, New York University, 1974: Alexander Puškin; a symposium on the 175th Anniversary of his birth. Editors: A. Kodjak [&] K. Taranovsky. New York, 1976. (New York University Slavic papers, vol. 1)
- Pusylewitsch, T.: Die Rechtsstellung des Ausländer in Polen. Baden-Baden, c1976. (Schriftenreihe zur Rechtsstellung des Ausländers in den sozialistischen Staaten, Bd. 3)
- Roosevelt, F. D.: Roosevelt and Churchill; their secret wartime correspondence. Ed. by F. Loewenheim, H. D. Langley, M. Jonas. London, c1975.
- Ryavec, K. W.: Implementation of Soviet economic reforms; political, organizational and social processes. New York &c., c1975. (Praeger special studies in international politics and government)

- Sadnik, L. : Vergleichendes Wörterbuch der slavischen Sprachen. Von L. Sadnik, [ & ] R. Aitzetmüller. Bd. 1. Wiesbaden, 1975.
- Sajko, K. : Die Rechtsstellung des Ausländers in Jugoslawien. Baden-Baden, c1976. (Schriftenreihe zur Rechtsstellung des Ausländers in den sozialistischen Staaten, Bd. 4)
- Schweitzer, C. C. ed. : Das deutsch-polnische Konfliktverhältnis seit dem Zweiten Weltkrieg ; multidisziplinäre Studien über konfliktfördernde und konfliktmindernde Faktoren in dem internationalen Beziehungen. Hrsg. v. C. C. Schweitzer & H. Feger. Boppard am Rhein, c1975. (Beiträge zur Konfliktforschung)
- Setschkareff, V. : Alexander Puschkin ; sein Leben und sein Werk. Wiesbaden, c1963.
- Simon, J. : Ruling communist parties and détente ; a documentary history. Washington, c1975.
- Spira, G. : A Hungarian Count in the Revolution of 1848. [Tr. by T. Land. Translation revised by R. E. Allen] Budapest, 1974.
- Szporluk, R. : The influence of East Europe and the Soviet West on the USSR. New York &c., c1976. (Praeger special studies in international politics and government)
- Teubner, H. : Exilland Schweiz ; dokumentarischer Bericht über den Kampf emigrierter deutscher Kommunisten 1933-1945. Berlin, 1975.
- Turgenev, I. S. : Tourguéneff and his french circle. Ed. by E. Halperine-Kaminsky. Tr. by E. M. Arnold. London, 1898.
- Ulam, A. B. : Ideologies and illusions ; revolutionary thought from Herzen to Solzhenitsyn. Cambridge, Mass. & London, 1976.
- Vucinich, A. : Social thought in Tsarist Russia ; the quest for general science of society, 1861-1917. Chicago & London, c1976.
- Wädekin, K. -E. : Sozialistische Agrarpolitik in Europa. I. Berlin, 1974. (Osteuropastudien der Hochschulen des Landes Hessen. Reihe I. Giessener Abhandlungen zur Agrar- und Wirtschaftsforschung des europäischen Ostens, Bd. 63)
- Winczorek, P. : Miejsce i rola SD w strukturze politycznej PRL ; zagadnienia wybrane. Warszawa, 1975. (Wydawnictwa problemowe ogólnopolityczne, tom 1)
- Wójcik, Z. : Rzeczpospolita wobec Turcji i Rosji 1674-1679 ; studium z dziejów polskiej polityki zagranicznej. Wrocław &c., 1977.
- Woronitzin, S. comp. : Bibliographie der Sozialforschung in der Sowjetunion (1960-1976). Bibliography of social research in the Soviet Union (1960-1970). München, 1976.
- Zeman, Z. : The Masaryks ; the making of Czechoslovakia. London, c1976.
- Академия наук СССР. Институт государства и права : Многосторонне экономическое сотрудничество социалистических государств ; документы за 1972-1975 гг. Под общей ред. П. А. Токаревой. Мос., 1976.
- Академия наук СССР. Институт русской литературы : Библиография произведений А. С. Пушкина и литературы о нем. 1949 юбилейный год. [Сост. : С. Л. Баракан и др.] Мос. и Лнг., 1951.
- Академия наук СССР. Институт славяноведения и Балканистики : Зарубежные сла-

- яне и Россия; документы архива М. Ф. Раевского, 40–80 годы 19 века. [Редкол.: С. А. Никитин (отв. ред.) и др. Сост.: В. Матула, И. В. Чуркина] Мос., 1975.
- Академия наук СССР. Институт славяноведения и балканистики: Очерки революционных связей народов России и Польши 1815–1917. Под ред. И. С. Миллера (отв. ред.) и др. Мос., 1976.
- Академія наук Української РСР. Інститут держава і права: Історія державства і права Української ССР. [Редкол.: Б. М. Бабій (отв. ред.) и др.] Киев, 1976.
- Александр Фадеев в портретах иллюстрациях документах. Пособие для учителя. Составители Б. Л. Беляев и др. Изд. 2. доп. Лнг., 1975.
- Бурлацкий, Ф. М.: Мао Цзэ-дун "Наш коронный номер—это война, диктатура". Мос., 1976.
- Веневитинов, Д. В.: Полное собрание сочинений. Под ред. и с примечаниями Б. В. Смиренского с приложением свода биографических данных и библиографии. Вступительная статья Д. Д. Благого. Мос. и Лнг., 1934. [The Hague, 1967]
- Всесоюзная Коммунистическая партия (большевиков). 17. Конференция. Мос., 1932: 17 [т. е. Семнадцатая] Конференция Всесоюзной коммунистической партии (б); стенографический отчет. Мос., 1932. [Tokyo, 1976]
- Вънокъ М. Ю. Лермонтову; юбилейный сборникъ. Мос. и Петроград, 1914. [Фотодубликат., 1977]
- Виноградов, В. В.: Поэтика русской литературы. Мос., 1976. (Его Избранные труды, [2])
- Гольдберг, Д. И.: Очерк истории рабочего и социалистического движения в Японии, 1868–1908 гг. Мос., 1976.
- Григорьян, К. Н.: Лермонтов и его роман "Герой нашего времени". Лнг., 1975.
- Грицкевич, А. П.: Частновладельческие города Белоруссии в 16–18 вв.; социально-экономическое исследование истории городов. Минск, 1975.
- Гусев, К. В.: Партия эсеров; от мелкобуржуазного революционизма к контрреволюции. Исторический очерк. Мос., 1975.
- Декабристы и русская культура. [Ред. кол.: Б. С. Мейлах (отв. ред.) и др.] Лнг., 1975.
- Историческая география России, XII начало XX в.; сборник статей к 70-летию профессора Любомира Григорьевича Бескровного. [Ред. кол.: А. Л. Нарочникий (отв. ред.) ред.] Мос., 1975.
- Калтахчан, С. Т.: Ленинизм о сущности нации и пути образования интернациональной общности людей. Мос., 1976.
- Кирпотин, В. Я.: Достоевский и Белинский. Изд. второе, доп. Мос., 1976.
- Кислягина, Л. Г.: Формирование общественно-политических взглядов Н. М. Карамзина (1785–1803 гг.). Под ред. И.А. Фодосова. Мос., 1976.
- Квакин. В. А.: Критика экзистенциализма Бердяева. Мос., 1976.
- Кутаков, Л. Н.: История международных отношений и внешней политики СССР, 1917–1972; пособие для учителей. Факультивный курс. Мос., 1975.

《研究活動報告》

- Ланда, С. С.: Дух революционных преобразований... Из истории формирования идеологии и политической организации декабристов 1816–1825. Мос., 1975.
- Лейбзон, Б. М.: Поворот в политике Коминтерна; историческое значение 7 Конгресса Коминтерна. Изл. 2-е, перераб. и доп. Б. М. Лейбзон [и] К. К. Шириня. Мос., 1975.
- Литературное наследство. Ред. В. Р. Щербина (гл. ред.) и др. Том 85. Мос., 1975. Содерж.—Валерий Брюсов.
- Лихачев, Д. С.: Великое наследие; классические произведения литературы древней руси. Мос., 1975.
- Международная научная конференция "Развитие и интернациональное сотрудничество социалистических наций". Мос., 1973: Социализм и нации; материалы Международной конференции "Развитие и интернациональное сотрудничество социалистических наций", проведенной 23–24 октября 1973 г... [Ред. кол.: М. И. Куличенко (отв. ред.) и др.] Мос., 1975.
- Молдавская ССР в Великой отечественной войне Советского Союза, 1941–1945; сборник документов и материалов, в двух томах. [Сост.: И. Э. Левит и др.] Том 2. Кишинев, 1976.
- Москва. Академия общественных наук. Институт научного атеизма: Религия и церковь в истории России; советские историки о православной церкви в России. [Общ. ред. и предисл. А. М. Сахарова. Сост. и авт. примеч., Е. Ф. Грекулов] Мос., 1975. (Научно-атеистическая библиотека)
- Москва. Академия общественных наук. Кафедра истории КПСС: Исторический опыт борьбы КПСС против троцкизма. [Под общей ред. К. И. Суворова] Мос., 1975.
- Москва. Институт марксизма-ленинизма: Коммунистическое движение в авангарде борьбы за мир, национальное и социальное освобождение; к 40-летию VII Конгресса Коммунистического Интернационала. [Ред. кол.: П. А. Родионов и др.] Мос., 1976.
- Москва. Публичная библиотека. Отдел рукописей: Воспоминания и дневники XVIII–XX вв. Указатель рукописей. Ред. и предисловие С. В. Житомирской. Мос., 1976.
- Овсяннико-Куликовский, Д. Н.: Собрание сочинений. Изд. 4-ое. Томъ 2. СПб, 1913.
- Овсяннико-Куликовский, Д. Н.: Собрание сочинений. Томъ 4. СПб, 1911.
- Полторацкий, Н. П. ред.: Русская религиозно-философская мысль 20 века; сборник статей. Под ред. Н. П. Полторацкого. Питтсбург, 1975.
- Принцева, Г. А.: Декабристы в Петербурге. Г. А. Принцева [и] Л. И. Бастарева. Лнг, 1975.
- Проблемы истории общественной мысли и историографии; к 75-летию академика М. В. Нечкиной [ред. кол.: Л. В. Черепнин (отв. ред.) и др.] Мос., 1976.
- Радио Свобода, Мюнхен. Исследовательский отдел: Собрание документов самиздата. [...подготовлен исследовательским отделом Радио Свободы, Мюнхен] Том 21, 21 А-Б, 22. Колумбус. б. г. (Архив Самиздата)
- Рост и организационное укрепление Коммунистической партии Молдавии 1924–1974;

- сборник документов и материалов. Редакционная коллегия : Н. К. Библейшвили и др. Кишинев, 1976.
- Семеновъ, Л. : М. Ю. Лермонтовъ; статьи и замѣтки. Мос., 1915. [фотодубликат, 1977]
- Соловьева, А. М. : Железнодорожный транспорт России во второй половине XIX в. Мос., 1975.
- СССР. Законы, статуты, и др. : Сборник законов СССР и указов Президиума Верховного Совета СССР 1938-1975. [В четырех томах] Том 1-4. Мос., 1975.
- Умняков, И. И. : Аннотированная библиография трудов академика В. В. Бартольда. Описание архива академика В. В. Бартольда. Мос., 1976.
- Черменский, Е. Д. : IV. [т. е. Четвёртая] государственная дума и свержение царизма в России. Мос., 1976.
- Чернов, В. М. : Записки социалиста-революционера. Кн. 1. Берлин и др., 1922. [Cambridge, 1975] (Memoir series, 13)
- 雑誌 (継続分をのぞく)
- Niepodległość ; Czasopismo Poświęcone Najnowszy Dziejom Polski. [MF] Warszawa. 1 (1929/30)-20 (1939) & Indeks za T. 1-16 (1929-37)
- Proletariat ; Organ Międzynarodowej, Socjalno-Rewolucyjnej Partii. (Polska Zjednoczona Partia Robotnicza. Komitet Centralny. Zakład Historii Partii) Warszawa. Nr. 1~4 (1883-1884)
- На Аграрном Фронте ; Орган Аграрного Института Коммунистической Академии. [МФ] Мос. [2] (1926)-[11] (4) (1935)
- Русская Мысль ; Журналь Научный, Литературный и Политический. Мос. [The Hague & Paris, 1971] 1 (Кн. 9-12) (1880), 4 (Кн. 1-12) (1883), 5 (Кн. 2-4, 6-12) (1884)

\* アンダーラインはマイクロフィルムを示す。